

インドの被差別地区を訪ねて

國 井 哲 義

はじめに

筆者は、今年三月、インド・カースト制度現地研修旅行（全国大学同和教育研究協議会主催、第五回インド・カースト制度現地研修旅行、二〇〇四年三月一九日～三月三〇日、参加者二一名）に参加する機会を得て、短期間で急ぎの旅ではあったが、幾つかの被差別地区を訪問し、筆者なりにその現状や解放運動についての認識を深めることができた。筆者にとっては四度目のインドへの旅となったが、今回は「団長」という重責を荷っての参加である。本来団長を務めていただくはずであった寺木伸明先生（桃山学院大学）が都合で参加できなくなり、急遽筆者がその代役を務めさせていただくことになったためである。本稿は現地で見聞したことの報告と、筆者の感想である。

一、チャウラー氏からの聞き取り

われわれのインドの旅は、ケーララ州のコーチンから始まった。三月二〇日、ガイド兼通訳のチャウラー氏とホテルで旅の日程の打ち合わせをしてから、彼からカースト制についての聞き取りを行なった。

氏は五三歳、デリー生まれでデリー大学出身、カーストはクシャトリアである。同行の日本人ガイド伊藤博敏氏によれば、インド人で最も日本語の上手なガイドではないかとのこと。

彼の西欧的（アーリア的）な顔立ちからも、彼が一見して上位カーストの出身だということがわかる。また、いかにも頑丈そうな体つきは、武人（クシャトリア）の家系だという説明をなると思わせる。

インドの被差別地区を訪ねて



チャウラー氏

したがって以下の内容は、インドの上層カーストに属するエリートの発言であることを念頭に置いておいてほしい。インドは厳しい身分制度が確固として存在している国であり、どの階層に属するかによって、見えている世界の現状も、発言内容も大きく異なる可能性があるからである。

まずチャウラー氏に、ダリット（dalit, スクリット語で「被抑圧者」の意味であるが、今日インドで「不可触民」を表す言葉として広く使われているので、本稿でも彼らを表す言葉として用いることにする）に関する諸問題の中で、現在最も差し迫った問題は何かと尋ねた。氏は二つの問題を挙げた。ひとつは教育の問題、もうひとつは出稼ぎの問題だという。

現在のインドの識字率は、公式には六五・四パーセント（二〇〇一年の国勢調査）とされているが、ダリットの識字率は、それよりもずっと低いのが現状である。チャウラー氏の説明では、ダリットの識字率の低さの最大の原因は、親が教育の価値を知らないためだという。子供は学校に行くよりも、親の手伝いをするものだと考えは現在でも根強いとのことであった。

この点に関しては、私にも思い当ることがある。私が初めて参加した大学同協のインド・カースト制度現地研修旅行（第二回現地研修、九七年一二月）のとき、チェンナイ（マドラス）のダリット地区を訪問したが、その子供たちは半数ぐらしか学校に行っていないようであった。週日にもかかわらず、たくさんの子供たちがわれわれを取り巻いたのである。現地の解放運動家の説明

では、自動車修理工場の雑役などの仕事で働いている子供もいて、なんと日当は五ルピー（一五円）だという。子供には雇い主から昼食が与えられるとのことで、親にとっては一種の口減らしの意味を持っているのだろう。

さらに言えば、ダリットの中でも、女性の識字率は極端に低いのではないかなと思われる。第三回目の現地研修旅行（九九年三月、私にとっては二度目のインド訪問）で、カルカッタの被差別地区で皮革業の中心地、チナ・プチの学校を訪問したが、低学年の教室の中でも、女子生徒の数は極端に少なかった。全体の十分の一程度だったのではないかと記憶している。高学年の教室の中に、私が見た範囲では女子生徒はひとりもいなかった。この地域全体が被差別地区であるが、その中にさらに女性に対する差別が存在しているわけである。「差別の重層性」という言葉が脳裡に浮かんだことを記憶している。

教育が受けられなければ、就ける職業の範囲は極端に狭められる。しかもダリットは、カースト制度によって、生まれながらに職業選択の大枠は定められているのである。結局彼らの多くは、カースト制度と教育の欠如のために、清掃、皮革業、洗濯、人力車夫、荷物の運搬などの、伝統的に賤業とされている職業にしかかざるをえない。その意味で、教育問題こそ差別を再生産している元凶と言えるのである。

チャウラー氏からの聞き取りに話を戻そう。氏が差し迫った問題として挙げたもうひとつの問題は、出稼ぎの問題であった。

近年多数の、主として下層カースト（ダリットを含む）のインド人が、サウジアラビア、アラブ首長国連邦などの湾岸諸国や南アフリカに出稼ぎに行って、建設労働、雑役、売春などに従事しているが、外国にまでカースト制度が持ち込まれ、差別が再生産されているという。彼らの人権救済には、まだほとんど手が付けられていないのである。

チャウラー氏に、「不可触民」解放運動の父、B・R・アンベードカル（一八九一―一九五六）について尋ねた。まず、彼の名前がインド人の間に広く知れ渡っているかどうか尋ねたところ、ほとんどのインド人は彼の名前は知っているだろうが、それ以上の詳しいこと、たとえば彼が解放理論の基礎を仏教に求めたことなどは知らないだろうとのことであった。

インドでキリスト教がどのようなイメージで見られているか尋ねた。ダリットが差別から逃れるために、キリスト教に改宗した事実をよく知られている。

インドのキリスト教徒の七割以上が前「不可触民」とも言われている。彼の回答はやはり、キリスト教徒と聞けば「不可触民」であるとのイメージを持たれて、差別の対象となる、というものであった。

カースト制と結婚について尋ねた。チャウラー氏によれば、田舎では今でも異なるカースト（実際はサブカースト、つまりジャティー）間の結婚はまったくないとのこと。とくに上位カーストの女性と下位カーストの男性との結婚は、「逆毛婚」として忌避されており、娘が親の反対を押し切って下位カーストの男性と結婚した場合、娘が親に殺される事件が絶えないそうである。

結婚の際の持参金について尋ねた。インドでは花嫁の親が花婿の親に持参金を支払う習慣があり、その際、金額が少なかったり、支払いがなされなかったりした場合には、花嫁が嫁ぎ先で焼き殺されることがあると聞いていたからである。

チャウラー氏によれば、現在でもそのような事例は、カーストを問わずあるそうである。ただ、持参金といっても、お金ではなく、オートバイや自動車のような「モノ」で要求されるのが普通であるとのこと。

だが、嫁を殺せば殺人罪に問われるのではないかという私の質問に、チャウラー氏は、裁判は通常一〇年はかかり、罪を立証するのは困難だと答えた。さらにインドは賄賂社会であり、警察官や裁判官を買収するのは簡単で、事件はいつかうやむやになってしまうとのことであった。

少女売春について尋ねた。以前NHKの衛星放送で、BBCの取材だったと記憶しているが、インドには売春を生業としている「不可触民」のサブカースト、ベディアがあり、少女が一歳頃から客を取って家族の生活を支えねばならない過酷な現実が放送されたことがあったからである。

チャウラー氏によれば、確かにそのようなサブカースト（ジャティー）は存在するとのことであった。しかし彼は、そのジャティー名はヴェーシャ（Vesha）であると言う。ベディアとヴェーシャは、同じジャティーを指しているのだろうか。両者は発音が似ているとも、異なっているとも言えよう。これが同じジャティーを意味するものなのか、それとも別のジャティーのことなのか、確認することはできなかった。

二、マラリクラム訪問

三月二〇日午後、コーチンから南に約四〇キロのところにある被差別地区、マラリクラム (Mararikulam) を訪れた。腰に白い布を巻いた七人の男性が大鼓とシンバルでリズムをとり、頭に大きな花飾りを載せた赤い衣装の二人の踊り子 (ひとりには女装した男性と後に判明、二人は兄と妹であった) が身をくねらせて踊っている。大勢の村人たちが二列になってわれわれが村に入るための通り道をつくり、全員にココ椰子から作った首飾りをつけてくれる。これが彼らの歓迎の仕方なのだろう。歓迎の踊りは、後で聞いたところによると、「アンマンコラム」といって、三百年も前から伝わるものだという。



アンマンコラム

われわれは、広場に置かれた椅子に着席した。ココ椰子の実が全員に配られる。椰子ジュースを飲んだ後、村の見学と聞き取りが始まった。この村は一四世帯、人口は五五人で、全員がヒンドゥー教徒という。ジャータイ (サブカースト) 名は「アンディキリティエン」、家族の一月の生活費は二〇〇〇ルピー (五〇〇〇円) ほどという。買うものは、お米や魚が中心で、とくにお米は、耕作地を持たないために必ず買わねばならないとのことであった。

この集落の家の造りは二種類。椰子の葉を編んで周りを囲んだものと、レンガ造りのものである。レンガ造りの家の建築費用は五〇〇〇〇ルピー (一三万円)、州政府から半額の補助があるとのこと。椰子の葉造りの家は四〇〇〇ルピー。こちらは二日もあれば建てられるという。

高校四年生の青年から話を聞いた。彼は大学に行きたいとの強い希望を持っていた。学費は五〇〇〇ルピーぐらいかかるが、リザーベーションシステム (マインリティのための特別枠) があって、その一割か二割払えば大学に行けるとのこと。この若者は、教育を受けなければ、貧困や差別から抜け出せないことを身にしみて知っているのだろう。

村人の仕事は、村の中や周辺部に植えられている椰子に関するものが主なもののようであった。椰子の木の細工や、実の繊維からロープを作ったりする仕事である。ロープは、集荷場のようなところに大量に積み上げてあった。

インドの被差別地区を訪ねて

他の仕事としては、農作業の手伝いに畑に行ったり、セメントなどの荷物運びをすることもあるとのこと。面白いことに、亀を捕って生計を立てている人もいた。

飲み水はどうしているのかと尋ねると、どこでも地面を三メートルほど掘れば、水は出てくるとのこと。チャウラー氏によれば、インドではほとんどのところで水には不自由しないという。人間は水が得られれば、最低限生きていけるのである。

差別はありませんか、というわれわれの問いに、意外にも、すでに解放されている差別はありません、との回答があった。この問題については別に章を設けて論じることにする。

そろそろ引き揚げようかというとき、村人からお金を要求された。仕事を一日休んで歓迎をしたのだから、その分の補償をして欲しいというわけである。日本から持参した文房具や衣類はすでに渡してあったが、さらに一〇〇〇ルピーの代表に手渡しして村を離れた。

このお金は、もちろんわれわれが納得して支払ったものである。しかし、このような小さな出来事にも、金銭に関する日本とインドの大きな「文化の壁」を感じずにはいられなかった。問題は単に、彼らが貧しく、われわれが比較的に「豊か」であるというところにとどまるものではないであろう。日本ではこのような場合、金銭を要求されることはまずないからである。日本が今よりもずっと貧しかった時代でも、「豊かな」外国人を歓迎したとき、相手に金銭を要求することはなかったのではないかと思う。問題はやはり長い歴史の中で培われた「文化」なのだ。

コーチンのホテルで出会ったコーチン在住の日本人女性、デビス・真美さんからいただいたメールによると、インド人は、お金のある者からは取れるだけ取れと考えるとのこと。これは、力やお金のある者が弱い者や貧しい者を助けるのは当然だとする「インド人の無言のバランス形態」なのだそうである。なるほど、インドを旅していて、意外な場面で金銭を要求されることは多い。日本人の中に騙されたと感じて、もう二度とインドになど来るものかと「悲憤」したりする者がいるが、それもこのあたりに大きな原因がありそうである。

今回の旅でも、博物館でガイドをしてくれた女性から、チップとしてザールペンを要求されたり、タージマハール観光で、男性が近づいて来て、こちらの

ほうがカメラのアンクルがいい、などと言って勝手に私のカメラを持ち去って、頼みもしないのに辺りの風景や私の写真を撮り、後で金銭を要求したりすることがあった。その時は彼に五〇ルピー渡したのだが、一〇〇ルピーが相場だなどとさんざん嫌みを言われ、非常に不愉快な気分になされた。

日本でこのようなことを経験することは、まずないであろう。もちろん、経済発展が近年著しいといっても、インドは貧しく、とくに低カーストの人たちに仕事がないという事情は理解できる。しかしわれわれからすれば、絶えずこちらの財布が当てにされ、たとえ少額であっても無言でお金が必要されていると感じるだけでも、普段使わない神経を使わされ、疲れ果ててしまうのである。今回の旅では、私を含めて体調を崩した者が相当数にのぼったが、原因は、ことごとくカレー味の食事、大気汚染、過密スケジュール、睡眠不足、そしてこの「文化の壁」だったのではないかと思う。

三、デービス・真美さんの話

すでに前章で名前を挙げたが、われわれは今回の旅の途中、コーチンのホテルで日本人女性、デービス・真美さんと知り合った。彼女は熊本県出身、インド人男性と結婚してコーチンに住んでいるが、当日は結婚記念日で、夫と娘さんと一緒に、たまたまわれわれが泊ったホテルで食事をしていたのである。

帰国後彼女から何度かメールをいただいたが、彼女は、われわれの旅の目的が「カースト制度の現地研修」と聞いたとき、意外な感じがしたという。彼女は周りでカーストによる差別を感じたことがあまりないというのである。

カースト制度にも地域による格差は存在する。一般にインド北部のほうが厳しく、彼女の住むケララ州のような南部のほうが緩やかであるとは言えるであろう。彼女はおそらく、インドで最も豊かな地域に住み、家庭もカトリックとのことなので、あまりカースト制を意識せずに生活してこられたのであろう。

しかし何度かメールを遣り取りするなかで、彼女が目撃したり、伝え聞いたりした事例をいくつか教えていただいた。たとえば、彼女の家族は、彼女の言葉借りれば、まあまあのお金持ちの大家さん（ヒンドゥー教のナイル・カースト）から二階を借りて住んでいるが、その大家さんの家族は、「サーバントクラス」の人たちとは壁があり、彼らを大事にもしないし、あまり話もしないという。また真美さんは、大家さんの娘が下の人たちと接するときの態度のひ

どさに、見るに見かねて激怒することもあるという。

ムンバイ（ボンベイ）の彼女の友人の家では、職のカーストがあるために、料理人、掃除人（トイレ掃除は別）、洗濯、子守りと何人もの人を雇わなければ家事ができないとぼやいているという。しかし彼女のいるケララ州では、ひとりのメイドが職のカーストを気にせず、料理からトイレ掃除までやるという。これも、カーストの地域格差のひとつであろう。

彼女からはまた、結婚についての興味深い話を聞かせていただいた。カースト制度の下では、結婚は同じカースト、同じ宗教が原則だが、彼女の娘さんの親友の家（キリスト教徒）では、父親の姪がヒンドゥー教徒の男性と結婚したがって、彼の親を説得するために田舎に行ったのだという。異なるカーストや宗教の間で自由に結婚が行なわれるようになれば、カースト制度は崩壊するのである。このような話も、カースト制度が揺らぎ始めているひとつの証左なのかもしれない。

四、ジャйна教徒の女性との出会い

三月二日夕刻、宿泊していたホテルの船着き場から、遊覧船で付近の水路のクルージングに出かけた。その時たまたま船上で、ジャйна教徒の女性、リーナ・メータ（Leena Mehta）さん（二〇歳前後と思われる）に出会った。



リーナ・メータさん

彼女はムンバイ（ボンベイ）在住で、パンフレットのデザインの仕事をしており、日本にも行ったことがあるという。チャウラー氏を紹介して、いろいろインタビューを試みた。

彼女は厳格に殺生戒（アヒンサー）を守っているという。チャウラー氏が補足説明をして、ジャйна教徒は、肉や魚はもちろんのこと、土の中にできる野菜（根菜）は、土の中の虫を殺す可能性があるのだから食べないとのこと。彼らはまた、アルコールも一切口にしないという。発酵の際のバクテリアを殺す可能性があるからである。彼らの殺生戒は極限にまで徹底されているようである。彼女は本当に生き物は殺さないのでしょうか、との私の問いに、チャウラー氏は、彼女は夫以外の生き物は殺さないでしょう、

と笑っていた。

彼女はまた、輪廻転生を信じているという。つまり、殺生戒などの戒律を守ってこの世で善行を積みめば、また善人となって生まれ変わることができると思われているのであろう。私が、もしもゴキブリに生まれ変わってしまったらどうか、と言うと、チャウラー氏は、もしも悪行によって人間以外のものに転生したら、八四〇〇〇回生まれ変わらないと人間に戻れない、と真顔で言う。ジャイナ教徒が戒律を厳格に守ろうとするのも、悪行を積みめば永遠に人間に転生できないという恐怖があるためかもしれない。

リーナ・メータさんによれば、船上でわれわれに出会ったのも、輪廻の中の出来事であるとのこと。ジャイナ教徒にとっては、輪廻こそこの世のあらゆる出来事を解釈する基盤になっているのであろう。

ところで、ジャイナ教徒といえば、殺生戒を厳格に守っている人たちとして有名であるが、その一方で社会的には商業活動に携わる人たちとしても知られている。ジャイナ教徒の大富豪の商人は、インドでは有名である。

殺生戒と商業活動は根底においてつながっているものであろう。というのも、最も殺生戒を犯さずに済む経済活動は、商品を右から左に動かして利ざやを取る商業活動にはかならないからである。農業や漁業などは、何らかの意味で他の生命を犠牲にすることで成り立っていると言えなくもない。第二回現地研修の旅（九七年）でムンバイ（ボンベイ）のジャイナ教寺院を訪れたとき、日本語のできる信者に出会ったが、彼は宝石商で、しばしば神戸に真珠の買い付けに行くとのことであった。真珠の養殖は、貝を殺すので殺生戒を犯すことになるが、真珠の仲買いなら殺生戒を犯すことにはならないのであろう。

ジャイナ教の出家信者は、在家信者よりも一層厳格な殺生戒を守っているとのこと。彼らは空気中の小さな生き物も殺さぬように白い布きで口を覆ったり、路上の生き物を踏まぬように、ほうきを手にしたりにしているという。さらに言えば、食べることは何らかの意味で他の生命を犠牲にすることにつながるので、殺生戒を守るための最良の方法は断食と考えられており、したがって断食を行なって死に至ることこそ最も理想的な生き方とされているという。このような教えは、グルメ指向の現代日本人の在り方とは大きく隔たっている。正反対の極にあるとも言える。だからジャイナ教は、一般の日本人にとって興味の対象となることはあっても、信仰の対象とはなりえないのであろう。しかし現

インドの被差別地区を訪ねて

にジャイナ教はインドで生きつづけている。全人口の〇・五パーセントという統計（九一年国勢調査）があるが、それでも五〇〇万人の信者がいることになる。

このような、ある意味で極端な教えを説くジャイナ教は、仏教とほとんど同じ時期に成立したにもかかわらず、インド以外にはほとんど広まらなかった。逆に言えば、ジャイナ教のような宗教は、インドのような、無宗教や自己主張の弱い宗教では存続できない「苛烈な」宗教国家にして初めて存在理由が与えられるのかもしれない。船上でたまたま出会った女性がジャイナ教徒であるというようなことも、宗教国家インドならではの得がたい経験ではないかと思つて、少々嬉しくなった。

五、ゴアの被差別地区訪問

三月二二日、われわれはコーチンから空路ゴアに到着し、空港でプセカール（D. J. Puskas）氏夫妻の出迎えを受けた。

私が彼と会うのは、前回の現地研修旅行（〇二年二月）以来二度目である。彼自身のカーストはシュードラだそうだが、仏教（アンベードカル主義）に基づいてドリット解放運動を行なっている。最近彼は『ドリットはどのようにして、なぜ仏教徒になったか（How and Why Dalits become Buddhists）』という本を書いたという。

前回の旅で、ゴアで解放運動家たちと交流会を持った折に、彼は最もラッカルな意見を述べていたが、明らかに他の運動家たちから発言を封じられ、みんな連中と話していてもだめだ。私のムラ（被差別地区ヴァスコ・ダ・ガマ）に行つて、食事をしながら話そう」と語っていた。彼は、五〇歳前後と思われるが、インドで今まで出会った中では、最も情熱的な解放運動家のひとりである。今回、ゴアは彼が案内してくれるというので、非常に心強かった。

空港からホテルまでバスで移動する際に、車窓から外を眺めていると、歩いている人たちの中に西欧的な顔立ちの人が多いのに気づいた。ゴアは、一九六一年インド軍に武力解放されるまで、ポルトガルの植民地であった。彼らの中にはヨーロッパからの観光客もいるであろうが、ポルトガル人の末裔でインド国籍を持つ者（アンゲロインディアンと呼ばれ、リザーベーションシステムで対象となっている）も多いのであろう。

現地のガイドによれば、ゴア州の人口は一五〇万人ほどで、ダリットはその二(三パーセント)だという。ダリットの主なジャーティは、マハールとチャマール。マハールの主な仕事は竹細工、チャマールは靴修理である。竹細工や製靴(皮革)業は、日本でも被差別部落の典型的な産業である。この点でも、インドと日本の差別問題の類似性、さらには本質的な連関を見てとることができる。

三月二三日、プセカール氏の案内で、被差別地区パルセ(Palase)を訪問する。パルセはマハールの集落で、世帯数およそ五〇戸、人口は約三〇〇人(半数は子供)という。

まず村内を見学する。どの家の前にもヒンドゥー教の祠(はこ)があり、ミントの木が植えられている。多くの家の玄関の壁には、アンベードカル(Ambedkar)の肖像画や写真が貼られている。何軒かの家では内部を見せてもらったが、居間の壁に大きなアンベードカル(Ambedkar)の肖像画が貼られていた。もともとヒンドゥー教を信仰していた村に、最近仏教(アンベードカル主義)が導入されたのであろう。村中いたるところで、ヒンドゥー教とアンベードカル(Ambedkar)の肖像画が共存していた。

村の空き地に日除け用のシートを張って椅子を並べ、プセカール氏、ダリット・マハールサンガ(ゴア地区のダリット解放団体)の代表、ヴァサント・K・パレワール氏、そして村人二〇名ほどがわれわれと向い合う形で座って、交流会と聞き取りが行なわれた。聞き取った内容を箇条書きにすると次のようになる。この村の現状がかなり明らかになると思う。

- 一、仕事は主に竹細工で、女性が行商に行く。
- 二、村の土地は州政府から与えられたもので、コミュニティの共有である。
- 三、土地がないので農業はやらないが、日雇いで畑仕事に行くこともある。
- 男性の日当は一〇〇ルピー(二六〇円)、女性は六〇ルピーほどである。
- 四、ただし日雇いの仕事があるのは、年に二ヶ月ほどである。(雨期と乾期がはっきり分かれているインドでは、そもそも農作業のできる期間は非常に限られている)。
- 五、仕事のないときは、米の磨ぎ汁で空腹を紛らすこともある。(日本でも敗戦後の食糧難の時期に、乳の出ない母親が子供に磨ぎ汁を飲ませた例のあることを、私も母親から聞いたことがある)。
- 六、子供たちは一〇〇パーセント学校に通っている。リザーベーションシステ

ムで大学に通っている者も一〇名ほどいる。

子供たちが一〇〇パーセント就学していると聞いて、少々驚いた。村人の話では、かつては学校に行ける者は少なかったが、今では改善されているとのこと。地域差はあるだろうが、インドの六五・四パーセントの識字率(二〇〇一年度の国勢調査)は、急速に改善されてゆくものと思われる。

宗教について尋ねると、この村は全員がヒンドゥー教徒であるが、プセカール氏から仏教を勉強中とのこと。多くの家にはアンベードカル(Ambedkar)の肖像画が貼られていたが、プセカール氏が仏教(アンベードカル主義)で村人を教化して、改宗に向けて組織しているのであろう。

ところで、インドの仏教徒の数は、統計によって大変な差があるが、このような村の現状にもその原因があるのではないかと思った。たとえばこの村は、表向きは全員がヒンドゥー教徒であるが、実際は仏教への改宗に向けて組織化が進んでいるのである。仏教に完全に改宗してしまうと、カースト外の民と見なされてリザーベーションシステムの恩恵が受けられなくなるなどの理由から、表向きはヒンドゥー教の看板を掲げていながら、実際は仏教(その多くはアンベードカル主義)に基づいてコミュニティをつくっているところも多いのではないか。仏教の側からは、そのようなコミュニティの人々は仏教徒としてカウントされるが、政府の公式の統計などにはヒンドゥー教徒としてカウントされるのであろう。山際素男氏がインドの仏教徒について「五〇〇〇万とも一億五〇〇〇万とも言われる仏教徒」と書いていたが、この村で、三倍もの誤差のある数字の原因のひとつを見たような気がした。

六、「差別はない」について

マラクリラム地区について、パルセ地区でも、「差別はありませんか」という質問を試みた。昔はあったが、今はない、との答えが返ってきた。たとえば現在は、祭りのときなども、昔と違って村の外部の人間(上位カースト)とも同じ所で飲食するという。

それではとばかりに、少し意地が悪いかなとも思ったが、結婚と飲み水について尋ねてみた。他所の同じジャーティ(マハール)との結婚はあるが、ジャーティの壁を越えての結婚はないという。

よその村の（上位カーストの）井戸の水を飲むことができますか、との問いに、そのようなことは起っていないが、実際にそうしようとすれば問題は起るだろう、との答えが返ってきた。

結婚にしても飲み水の問題にしても、ここで語られていることは、われわれからすれば明白な差別以外の何物でもない。しかしマラリクラムの場合と同じく、彼らはきっぱりと、差別はないと言い切るのである。

これはどういうことなのであるか。

彼らは、ひとつには法律上の差別のことを言っているのかもしれない。確かにインド共和国憲法では、人種、カースト、性、出生地を理由とするいかなる差別も禁止されている（第十五条）。なるほど法律上差別は存在しないし、存在してはいけないのである。

しかし法律に差別禁止が謳われているからといって、現実に差別があるかどうかは、それとは別の問題である。日本国憲法にも基本的人權の尊重は謳われているが、現実にはさまざまな差別事件が跡を絶たない。彼らは、法律的な建前の世界と現実世界のギャップは感じないのであるか。

われわれが驚くのは、差別はないとの言葉を、上位カーストの人々や政府の役人からだけではなくて、カースト制度の枠にも入らない「不可触民」の口からも聞かされることである。彼らは、差別は法律で禁止されているし、現実にも存在しない、と口々に語ったのである。被差別地区の中で差別について語るのは、いわゆる解放運動の活動家だけではないかと思われてくるほどである。

自覚的活動家以外の、一般の被差別民にとって、結婚、飲み水、職業などのカースト制度に基づくさまざまな差別は、いわば数千年続いた習慣であり、当然のことであって、差別とは考えられていないのかもしれない。

この点に関して、旅先から帰ってたまたま読んだ本の中で、沖浦和光氏は私を感じていたことを、極めて明瞭に次のように書いていた。

近世初期の社会では、それぞれの人間が生まれついた（身分）、あるいはそれぞれの人間の社会的分際を定める（身分制度）は、個々の人間の力ではどうすることもできぬ運命的なもの、つまり、「天が定めた自然の秩序」、すなわち（天命）と考えられていた。（沖浦和光、『水平、人の世に光あれ』、社会評論社、二四八頁）

インドの被差別地区を訪ねて

この文章は、日本近世の諸文献に、なぜ身分制度の本質や差別の是非について論じた著作が少ないのかという問題について、沖浦氏の出した結論の部である。ここで日本の身分制度について論じられていることは、そのままインドのカースト制についても当てはまるのではないか。インドの被差別民にとり、身分制度（カースト）は「天命」なのであって、それに起因する結婚、飲み水、職業に関する差別は、当然のこととは言わないまでも、個々の人間の力でどうすることもできぬこと、仕方のないことなのではないか。

ある事象を「差別」と呼ぶことの中にはすでに、それが不当なこと、克服されるべきことだということが含まれている。しかし個人の力ではどうすることもできないこと、仕方のないことだとすれば、それを「差別」と呼ぼうとしないのは当然といえよう。だから、アンベードカルのような人物が現れるまで、つまりカースト制度そのものを正面からとらえて、それを打破しようとする思想と運動が現れるまでは、カースト制度は二千年以上にもわたって「天命」と見なされて、論じられることさえない状態がつづいてきたのである。「差別はありません」という彼らの言葉は、実はそのようなカースト制度の歴史を反映したものであったのではなからうか。

九七年の現地研修旅行のとき、チェンナイ（マドラス）の解放運動の指導者が、まずダリットに自分たちが人間であることを教えることから運動を始めます、だから私たちの運動は「教育」なのです、と語っていたのを思い出します。うしなれば、自分たちがいつも人間以下の、家畜並みの扱いを受けているので、それを当然のことと考えて、立ち上がる力が湧いてこないというのでした。

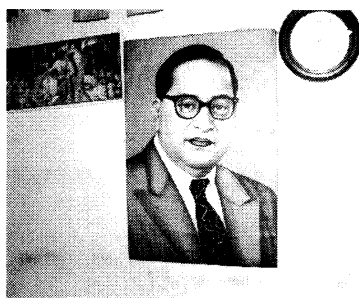
そのようなことを考えると、ブセカール氏がマハールの村に仏教（アンベードカル主義）を持ち込んで、カースト制度そのものを問題にし、打破する運動を行なおうとしていることは、大きな意味を持つであろう。彼らが今まで当然のこと、仕方のないことと思いついてこなかった自らの環境そのものが差別であると認識することから、彼らの本格的な闘いが始まるからである。

七、アンベードカルの個人崇拜

今回の旅で、ヴェナラシ（ベナレス）近郊の被差別地区を訪問したとき、山下秀智先生（静岡大学）が壁に貼られているアンベードカルの肖像画を見て、

仏壇はないのですか、と尋ねられたことがあった。通訳を介して、家人からは、ありません、との返答があった。日本人なら、仏教徒の家には仏壇があって、それに向かって手を合わせるのは当然だと考えるであろう。ところがインドの仏教徒（アンベードカル主義者）の家には仏壇がないのである。

そのとき私はふと思った、インドの仏教徒は、日本人が仏壇に向かって合掌して祈るように、アンベードカルの肖像に向かって合掌しているのではないかと。



アンベードカルの肖像画

山際素男氏によれば、インドの仏教徒の七割はアンベードカル主義者であり、アンベードカルは菩薩として崇拜されているという。おそらく多くの仏教徒は、ちょうど日本人が仏像に手を合わせるようにアンベードカルの肖像画に向かって手を合わせながら、仏教徒としての誓詞を唱えているのであろう。明らかに彼は個人崇拜の対象となっているのである。

アンベードカルが聖人として崇拜されることは、ダリットの現状を考えれば仕方のないことかもしれない。彼らの多くは文字が読めない。そのため、彼らがアンベードカルの著作を読み、その思想を吟味し、そのうえで思想的基軸として解放運動に役立てるなどということは望むべくもないからである。

また現実の社会運動には、大義とともに、人々が結集する軸となる何ものが必要であろう。アンベードカル以外にそのような象徴的な役割を担うものがないことも、十分に理解できることである。しかし自らが聖人として崇拜されるような事態は、アンベードカル自身が目指した運動の方向と異なるものであることもまた事実であろう。

アンベードカルは「不可触民」解放の思想的根拠を原始仏教、すなわちブッダの教えに求めたが、その理由のひとつに、仏教が他の宗教と違って超越者（神）を持たず、したがってブッダも自己の神聖性を否定している、ということがあった。だからブッダは自分の教えについて無謬性を主張せず、信徒たちには、彼の教えが時と場合に照らして妥当でない場合には、それを修正したり、あるいは放棄さえできる自由が与えられていたというのである（B・R・アン

ベードカル、『カーリストの絶滅』、山崎元一他訳、明石書店、二〇六頁）。彼はこの点に、絶えず真理に対して開かれた宗教の姿、したがってカーリスト制度の基礎となつてそれを支えているヒンドゥー教とは対極にある宗教の姿を見たのであろう。

そしてアンベードカルによれば、仏教の核心は「道徳」にある。

ブッダの宗教は道徳である。それは宗教のなかに組み込まれている。仏教は道徳以外の何物でもない。仏教に神は存在しないということはほんとうである。神が占める位置に道徳があるのである。他の宗教にとって神であるものが、仏教にとっては道徳なのである（前掲書、二〇八頁）。

アンベードカルは仏教の核心を「道徳」と解釈することで、仏教を抑圧された者に開かれた宗教として構想した。つまり、超越者の名の下に人々を抑圧したり、支配したりすることなく人々を結集させることのできる宗教、人々が道徳的に高まることを通して自らを解放することのできる宗教として構想したのである。

しかし現状は、皮肉なことに、ブッダが聖人であることを否定したアンベードカル自身が、聖人として崇拜の対象になっているかに見える。このような事態を、彼自身は望まなかったのではないだろうか。彼はただ、「不可触民」が解放されること、彼の思想や行動がそのために役立つことだけを望んでいたからである。

たとえばマルクス主義は、最初は「科学」を標榜したが、いつしかマルクス自身が聖人扱いされ、彼の著作が無謬のものとされるようになり、そしてだれがマルクス主義の正統な後継者かをめぐって血で血を洗う内部抗争が繰り返されて自滅に至ったが、アンベードカル主義は大丈夫なのであろうか。ダリットの村のいたるところに彼の肖像画が貼られているのを見て、解放運動が着実に前進していることを実感する一方で、私は同時に一抹の不安も禁じえなかったのである。

八、「不可触民」同士の反目

ゴアの「不可触民」の二大ジャーティは、マハールとチャマールであるが、

両者は反目し合っているように見えた。われわれのバルセ村への訪問の際に村に来ておられたダリット・マハーサングのバレワール氏によれば、元来マハールよりもチャマールのほうが教育水準が高く、収入も多かったそうである。村人の話では、そのためかチャマールはマハールを見下しており、マハールと一緒に解放運動をすることはなく、逆に上位カーストと一緒にすることを望んでいるという。また、同じ「不可触民」でありながら、両者の間に通婚は一切なく、祭りのときにも交わることはないという。さらにチャマールは、仏教もアンベードカルも信じていないという。アンベードカルはマハール出身であるから、自分たちには関係ないということなのだろう。これでは解放運動は「共同戦線」を構築することはできない。本来打ち破るべきカースト制に、逆に足をすくわれているのである。

しかし私はこの点に、カースト制に関する極めて深刻な問題が含まれているのではないかと思う。内藤雅雄氏（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授）は、「不可触民」同士の反目について次のように書いている。

独立後のことであるが、ある農村調査によれば、自ら高い地位を主張するツァインバルは、マハールやマニングの靴の修繕はせず、また皮鞆の仕事をしたツァインバルは、そのカーストから追放された。またある村では、マニングが動物の死骸を運び、その皮を剥いだりしていたが、マハールのように屍肉を食さないということで、自分たちをマハールより上位と考えていた。上位・下位をめぐるマハールとマニングの争いはどこでも激しかったようであるが、ある農家の結婚式で、村内の人々に食事を供するにあたって、マハールを先にするとマニングは食事を受け取らず、逆にマニングが先だとマハールが食べようとしなかったといった事態が報告されている。こうしたことは彼らの解放運動の過程で、不可触民カースト出身者とカースト・ヒンドゥーを問わず、何人もの活動家によってきわめて深刻な状況として捉えられた。（『マハールシュトラにおける不可触民解放の思想と運動』、『インドの不可触民』所収、明石書店、二九八―二九九頁）

おそらくゴアのマハールとチャマールにも、どちらが上位かをめぐって、これと同様の反目と差別があるのであろう。一般にチャマールは仏教やアンベ

インドの被差別地区を訪ねて

ドカルの思想に関心を示さないと言われているが、彼らにしてみれば、自分たちよりも下位のジャーティ出身者の思想や運動に賛同などできるものか、ということなのであろう。カースト制度の打破を訴えた思想が、カーストに基づいた差別意識によって拒絶されているわけである。しかも拒絶しているのは、やはり「不可触民」として差別の海に呻吟している人たちののだ。

これがカースト制度の根深さであり、現実なのだろう。「不可触民」解放運動は、このような困難を根本から打破しなければならぬのである。道のりの遠さを感じずにはいられない。

九、インド女性の地位

バルセ村での交流会の最後に、メンバーのひとりがその場に村の女性たちがいらないことに気づいて、「女性は出て来ないのですか」と尋ねると、「声をかければ出て来ますが……」との答えが返ってきた。この言葉を額面通り受け取っても、やはり問題は残るであろう。つまり女性は、声をかけられなければ、公の席に出ないものとされているのである。ここからも、インド女性が非常に低い地位しか与えられていないことは推測できるであろう。

インド女性の地位の低さについては、いろいろな指摘がなされており、NHKなどの報道（たとえば「生まれながらの差別」によれば、さまざまな女性解放運動も起ってきているようである。すでに述べたように、持参金を払って、に焼き殺される花嫁の例、被差別地区の学校の女子生徒の数の少なさなど）、女性の地位の低さを物語るものであろう。

とくに被差別地区の女性たちは、カースト制度による差別と、性による差別の二重の差別の中に置かれている。しかも解放運動がすでに存在しているところさえ、どのように女性解放の取り組みがなされているか尋ねても、具体的な内容のある回答は、ほとんどの場合返ってこない。このような点も、今後の解放運動が克服してゆかねばならない課題だろう。

一〇、ゴアの先住民族

三月二四日、われわれはフォート・アグアダを訪れた。フォート・アグアダは、一七世紀にポルトガル人が、マントヴィー川河口にゴアの守備拠点として築いた要塞で、現在内部は刑務所として使われている。私にとっては二度目の

訪問である。

フォート・アグアダからホテルへの帰路、途中で先住民族（ST、指定部族）と思われる人々の集落に立ち寄った。ゴアに来る度にこの集落を訪れているので、私にとっては三度目の訪問ということになる。



ちなみに先住民族は、インド全人口の約七パーセントを占め、「不可触民」（約一七パーセント）とともに、カーストにも入らない最下層の人間として差別を受けている。一般に「ダリット（dalit、被抑圧者）」と言われているのは、彼ら先住民族と「不可触民」のことである。一説には、彼らがヨーロッパ諸国、西アジア、北アフリカに流れていって、漂泊の被差別民ロマ（ジプシー）になったと言われている。

集落を訪問してまず感じたことは、来る度ごとに生活環境が改善されていることである。最初の、九七年の訪問のときは、椰子の葉で一メートルほどの高さに周りを覆っただけの、大きな饅頭のような形をした「家」が並んでいるだけだったが、前回（二〇〇二年）には、粗末ながら周りを板で囲んだ家の形をしたものになり、今回は一台のオートバイまで置かれていた。オートバイはビール会社に勤めている方の所有という。

ガイドのチャウラー氏を介してごく短時間の聞き取りを行なった。内容は次のようなものである。

ここに移動してきたのは、一五〇二〇年前である。（最初の訪問のときには、彼らは、カルナータカ州の山の方から来たと話していたように記憶している）。仕事を求めてやって来た。ここでの仕事は、主に石運びや土運び。行商はしていない。（先住民族はよく街角や道端で物売りをしている）。今一番欲しいものは仕事。仕事がなかなかなくて困っている。今も何人かは仕事を探しに出かけている。宗教はヒンドゥー教。集落にリーダーと言える人はいない。州政府の援助は受けていない。

彼らは元来は漂泊民であるが、生活のためにゴアに仕事を求めてやって来て

定住しているのである。本来流浪生活を基本としているためか、財産である耳飾り、鼻飾り、首飾りなどの装飾品を絶えず身に付けている。銀製のものもあるが、ほとんどはイミテーションという。

彼らは、リーダー不在のためか、政府の援助も受けられずにいるという。おそらくインド全体では、このような解放運動不在の被差別地区は、無数に存在していることであろう。いや、少しでも運動のある地区のほうが、圧倒的少数なのではないか。広大なインド亜大陸で、どれほどの人々が見捨てられたままになっているのかと、少しく暗澹たる気持になった。

一、バグワン・ダス氏からの聞き取り

三月二六日、デリーのホテルで朝食をとりながら、バグワン・ダス（Bhagwan Das）氏とその御子息ラフル・ダス（Rahul Das）氏から、ダリット解放運動の現状について話をうかがった。



バグワン・ダス氏

バグワン・ダス氏はダリット出身の仏教徒で、著名な人権活動家であるが、現在の肩書きをお聞きしたところ、インド最高裁判所弁護士、IMADR（反差別国際運動）アドヴァイザー、アジア人権センター代表、ダリット連帯プログラム（Dalit Solidarity Program、現在はDalit Solidarity Peopleに改名）の創立者で終身会員とのことである。インドのダリット解放運動を代表するひとりと考えて間違いない。

ダス氏の説明では、「アジア人権センター」は、インド、パキスタン、バングラデシュ、タイ、スリランカ、韓国などの人権問題を扱う機関であり、昨年韓国で会議が開かれたという。氏は、アジア全体を視野に入れた人権運動の必要性を痛切に感じておられるようであった。奈良産業大学の桐村彰郎先生が質問し、それをチャウラー氏が通訳し、私がメモをとる形で聞き取りが行なわれた。

まず、氏が創立者であり、代表も務めていたDSP（ダリット連帯プログラム）代表を辞めた理由をうかがった。前回の現地研修旅行（二〇〇二年）でも、この話を聞いた参加者たちが一様に驚いてその理由を他の解放運動家に尋ねた

りしたが、明確な回答は得られなかったのである。

氏は次のように回答した。まず第一に、氏は選挙に破れて代表を辞したこと、第二に、その際にキリスト教徒のメンバーとのいさかきがあったことである。氏の話を要約すると次のようになる。

現在のDSPの代表は、ムンバイ（ボンベイ）の仏教徒でスッダルタ大学教授のメシュラム（N. G. Meshram）氏である。彼は弱い性格のため、キリスト教徒が容易に操れると見て、わざわざ代表にした人物である。私（ダス氏）はDSPの創立者で終身会員であり、DSPを辞めたわけではない。今年八月にまた代表を選ぶ選挙があるので出馬の予定である。キリスト教徒のメンバーは、外国からの援助金を私的に流用している。そのため私は、WCC（World Council of Churches）や Bread for the World からの援助金もストップさせている。DSPは、今はドイツのプロテスタント団体から資金援助を得ている。外国の団体に提出する報告書は立派だが、現在、援助金は個人的に流用されており、ダリット解放のために役立っていない。私は、最終的にはなんとか自分たちだけで財政を確立したいと思っている。現在キリスト教徒メンバーは、外国からお金をもらうことだけを考えているが、私が再び代表になったら、DSP憲法の遵守を徹底させたい。当面はインド共和党（RPI、ダリット政党）の活動が自分の考えと一致しているので、この組織を強化したいと考えている。（RPIは四分五裂の状態にあるのでは、との桐村氏の質問に）、RPIは、最近では分裂から再統一されつつある。最近デリーで四派の会議が開催され、再統合の動きがある。DSPは、分裂を繰り返すなどのRPIの弱点に付け込んで大きくなった経緯がある。

やはりダリットの政党であるBSP（大衆社会党）は、解放のプログラムもイデオロギーもない政党である。たとえばその代表は、UP（ウッタール・プラデシュ）州ではチャマルであるが、マハーラーシュトラ州ではマハール、タミルナドゥ州ではファリアーであり、同じ「不可触民」でもジャーティが異なっている意見が全然まとまらない状態である。

また、一九八八年に創設されたDIO（ダリット国際機構）のカナダでの会議に参加したが、参加者たちは問題を理解しておらず、このような組織はあまり役に立たないと考えている。ダリット解放は、国際的な取り組みが必

インドの被差別地区を訪ねて

要だが、まず第一にはアジアの組織を強化すべきである。インドのダリットが、現在、多数サウジアラビアや南アフリカに出稼ぎに行っているが、ここでのインド人のコミュニティの中で差別が再生産されている現状があり、そういう人たちのためにも働きたい。

『部落民と不可触民（Burakumin and Untouchables）』という著書出版する予定である。

短時間の、しかも食事をしながらの聞き取りではあったが、外部からでは知らないことのできないインドの解放運動の現状が語られているのではないと思う。

たとえば解放運動の内部に、外国からの援助を流用して私腹を肥やす者があると語られていたが、これは本当であろう。立派な報告書は提出されるが、よく調べてみると運動の実体は何もなかったというような話もよく耳にする。外国の運動にかかわる場合には、当然のことだが、相手をよく見極める必要があると思う。

BSP（大衆社会党）の内部分裂の原因が「不可触民」同士の反目にあるという指摘も興味深い。異なるジャーティ間の反目が、政党レベルでも活動を阻害しているのである。

ダス氏が人権運動の国際的な拡大、とりわけアジア地域での拡大の必要性を強調するのは、サウジアラビアなどの湾岸諸国や南アフリカへのインド人の出稼ぎという問題があるためであることもわかった。外国でのインド人のコミュニティで、カースト制による差別が再生産され、深刻な人権問題を引き起こしているのである。

しかし同時にダス氏は、DIO（ダリット国際機構）のような国際的なダリット解放運動の現状にも不満を持っているようであった。おそらく彼には、運動を担っている人たちが問題の所在や深刻さを理解せず、効果的な取り組みを行っていないとの思いがあるのであろう。

私には彼の、よどみなく静かに、しかも情熱的に語る姿がとくに印象的であった。

本稿には多くの思い違い、聞き違い、事実誤認が含まれているのではないか

と、ひそかに私は危惧をいだいている。読んでいただいた方には、あくまでもひとりの門外漢の書いたインド・カースト制の見聞記として受け取っていただければ幸いである。

なお本稿は、今回の旅に参加されたメンバーのひとりである大阪高教組の勝部尚子さんの詳細なメモに負うところが非常に大きいことを、最後に申し上げておきたい。彼女のメモがなければ、報告書をこのような形でまとめるのは不可能であった。感謝申し上げる次第である。